

## 「天皇の代替わり」

2018年07月21日

平成天皇は「天皇のお気持ち」なるビデオメッセージを公表した。内容は、象徴天皇としての務めが果たせなくなってきたので、代替わりしたいという要望であった。天皇は「物言わぬ」存在にさせられているので、天皇主義者たちは、代替わりを要望する言葉を聞いて驚愕しただろう。務めが果たせないから代替わりをしたいという要望は究極の「人間宣言」である。安倍政権にとっては、色々な思惑があるだろうが、来年の4月30日に退位、翌5月1日に新天皇が即位するという規定路線となっているようだ。

平成天皇は、現憲法の象徴天皇であることを自分の務めと受け止め、それは、国民と共にあることだとし、被災地を訪ね、同じ目線で問安している。そして、昭和天皇の戦争責任を自分で贖罪したいと戦跡へ慰霊の旅に行っている。天皇のこれらの言動は、安倍政権には面白くないのではないのか。安倍政権は憲法を改定し「象徴天皇」から「元首」に変えたい、また、先の戦争に対し、責任はないと「東京裁判史観」からの脱却を目指している。リベラル派の人々の中には支持する向きもあるようだが、天皇の言動によって、平和に向かっているようにも、国の有り方が左右されることに、私は反対である。国の有り方は天皇ではなく、主権を持つ国民が決めることであるからである。平和を求める天皇であっても、時代が変われば「軍神」に変身させられる可能性がある。

『週刊金曜日』の6月の15日号と29号に、矢崎泰久氏が連載している「下段倶楽部」に、「退と即」と「アソウ」というタイトルで天皇問題について書いていた。天皇の代替わりについて、メディアは積極的に取り上げ、国の有り方を考え直してみる必要があるという論調である。天皇問題をタブーにするなという発言をする人は、天皇制に批判的である。大日本帝国憲法から日本国憲法に変わったが、それは「天皇主権」から「国民主権」への移行であった。神聖不可侵の天皇は「人間宣言」をして、象徴天皇になった。神でもない象徴天皇を誕生させたことと、戦争放棄、基本的人権、三権分立に徹した民主主義とは矛盾しないか。矢崎氏は、「私は、象徴天皇制は民主主義にそぐわないと考えている。(中略)とにかく、天皇及び皇室について議論したらいいと思う。その機会が、天皇の退位と即位によって訪れたともいえる」と率直である。

キリスト教はモーセの十戒の第一戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」を核心とする信仰である。ところが、先のアジア・太平洋戦争時代、日本基督教団は、この信仰よりも天皇を「現人神」とする皇国史観を優先する立場で、戦争に協力した。教団は、1967年に「戦争責任告白」を公表し、謝罪とキリスト教信仰に立って、平和への意思を明らかにした。靖国・天皇制問題情報センターは6月13日に、「私たちは『天皇の代替わり』に反対すると共に天皇制支配構造の廃棄を求めます」という声明を出している。「権力による支配・統治の装置としての天皇制の本質を再確認すると共に、その天皇制の支配構造を現憲法が支えている事を再確認しなければなりません。そして、少なくともその現憲法において『(天皇の地位は)主権の存する日本国民の総意に基づく』と定められているというのであれば、その『意思』を明確にする時にきているのではないかと思います。この度の『天皇の代替わり』への反対はもちろんですが、これを改めての契機として近代以降の日本が保持してきた権力支配強化装置としての天皇制支配構造の廃棄を求め、改めて反権力・反天皇制の闘いのうねりを全国に広げていかねばならないと考えます。」私は徒な反権力主義者ではないが、天皇制の下では真の民主主義を創り上げられないと思っている。民主主義は天皇を人権を持つ「人」に解放することである。